

天草今富地区における暮らしに根ざした景観構造に関する研究*

Study on landscape architecture based on the local lifestyle in Imatomi area, Amakusa

芥 慎太郎**・田中 尚人***・岩田 圭佑****

By Shintaro AKUTA, Naoto TANAKA, Keisuke IWATA

天草市河浦町今富地区は重要文化的景観「天草崎津の漁村景観」の拡張2次申請予定地域である。本研究では、地域固有の歴史、自然環境、生活・生業を分析し、今富地区の景観構造を示し、地域住民の空間認識を把握することを目的とする。研究の成果として、今富地区は古くは陸上交通の要衝でありカクレキシタン関連の史跡が豊富で、入り江や干潟を干拓により造成してきた歴史を持ち、迫と呼ばれる谷地形が景観構造の基盤となっていることを示した。主産業である農業や山稼ぎを基盤として、迫ごとに固有の農村景観が形成されており、地域住民の集落境界に対する認識や微地形に対する呼称を分析し、暮らしに根ざした景観構造の変化を読み解いた。

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

今富地区は国選定重要文化的景観「天草崎津の漁村景観」の選定範囲に隣接し、同拡張2次申請予定地域である。農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究では「文化的景観」の保護の在り方として『普段から慣れ親しんだ身の回りにある伝統的産業及び生活に関連する景観の中に、その地域の歴史及び文化を見出し、美しさ及び新たな価値を発見することは極めて文化的な行為であり、このような行為を文化財保護の観点から捉え直すことが重要である。』¹⁾と記されている。

本研究では、文化的景観の調査手法に基づき、天草今富地区の歴史、自然環境、生活・生業の変遷を分析し、景観構造を把握する。さらに地域住民の景観認識に関して考察することを目的とする。

(2) 既往研究と本研究の特徴

景観特性や環境認知に関する既往研究として、釣り人やダイバーの視点から海岸環境の景観特性を明らかにした志摩らの研究²⁾がある。また、石川県輪島市海士町において地域住民へのヒアリングからメンタルマップを作成し、地域住民の空間認知を明らかにした北條らの研究³⁾や小字名と土地利用形態との一致状況を分析した田原

らの研究⁴⁾がある。本研究は土地造成過程や土地利用の変遷過程、歴史・史跡などと地域住民の空間認識を照らし合わせ、考察を行うところに特徴がある。

2. 今富地区の集落形成プロセスの整理

本章ではまず今富地区の概要と周辺地区との関係を示す。次にカクレキシタンに関する歴史や現在において残存する史跡の分布を整理する。今富地区において顕著な土地造成手法である干拓の変遷を整理することで集落形成過程および現在の今富地区の景観構成の基礎的事項を明らかにする。

(1) 今富地区の概要

今富地区は熊本県の天草下島の南西部、羊角湾に位置する農村である。人口は男187人、女223人、総計410人で世帯数は181世帯である⁵⁾。周囲を標高200m～300mの山々に囲まれ、地質は耐水性や保水力が低い第三期層白亜系であるが、年間平均気温17.7℃、年間降雨量1,800mm前後と温暖な気象条件のため、米や果樹、野菜などの栽培に適している⁶⁾。

次に周辺地区である崎津・大江地区との関係について記述する(図1)。まず崎津地区と今富地区との関係について示す。メゴイナイと呼ばれる崎津地区の漁師の婦人が今富地区に魚類販売、米や野菜との物々交換のために回っていた。またビャラーと呼ばれる薪にならない小さなしめ木(釜炊き、風呂焚きを使う)を今富地区から崎津地区まで運び販売するビャラー売りと呼ばれる売り子も存在した⁷⁾。このように、今富地区と崎津地区の間では交易に

*keywords: 農業, 文化的景観, 景観構造, 土地利用, 干拓

**学生員 熊本大学大学院自然科学研究科 博士前期課程

***正会員 博士(工) 熊本大学政策創造研究センター 准教授

Tel096-342-3579 naotot@kumamoto-u.ac.jp

自然科学研究科(〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1)

****正会員 博士(工) 熊本大学政策創造研究センター 特任助教

よる関係性が強かったようである。

今富の北西に位置する大江には 1933 年にガルニエ神父によって建立された大江天主堂がある⁸⁾。崎津教会は当初今富地区に建てられた。崎津から今富を経由し、今富から山道に入り大江へと続く神父道があり、ガルニエ神父はこの道を通して今富・大江間を行き来していたようである⁹⁾。

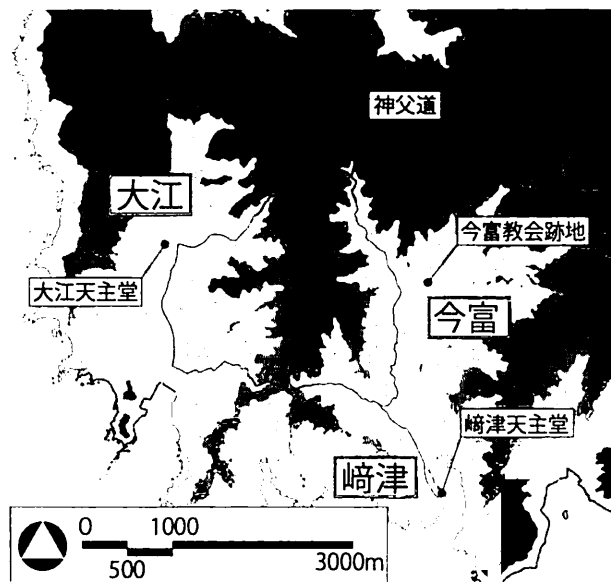


図1 今富・崎津・大江の位置関係

(2) カクレキリシタンの歴史

天草市教育委員会教育部文化課：天草市崎津の漁村景観保存調査報告書・保存計画書を整理し、記述した。

1) 歴史¹⁰⁾：天草市1566年にキリスト教が天草に伝来すると、今富を含む河浦町、天草町方面へ浸透した。その後1614年江戸幕府の全国的な禁教令施行によってキリスト教は禁圧・弾圧された。

1637年～1638年に勃発した天草・島原一揆に参加しなかった今富を含む天草下島の河内浦周辺（大江・富津地区）のキリシタンは、表向きは改宗するも信仰を維持した。神父の代わりに水方が洗礼などの儀式を行うなど、独自の儀式が生まれ、受け継がれていった。

しかし、1805年（文化2）年、今富、崎津、大江、高浜村の四ヶ村で、全人口の10,669人の約半分に当たる5,205人の異宗信仰者が摘発された事件（天草崩れ）が起きた。

その後、キリスト教が明治政府によって解禁されると、キリスト教への復活の動きが高まり、今富地区においても1881（明治14）年に教会堂が設置された。しかし、今富の住民の多くは禁教が解かれた後もカトリックへの改宗することなく、カクレキリシタン信仰を継続した。その後、水方の死去に伴って、儀式が継承されなくなり消滅する。キリシタン弾圧の時代、表向き棄教を装い神仏を信仰しながら、密かにキリシタン信仰の形を続け、変容しながら現在に至るまでその信仰形態を継続させているカクレキリシタンの存在が今富地区の特徴である。

2) 史跡¹¹⁾：今富地区にはカクレキリシタンに関する遺物や伝承が多く残されている。西川内集落には、水方であった中村徳市の屋敷跡（水方屋敷跡）があり、山腹には祠が祀られている。その中には、背中に翼を付けた神像（ウマンテラさまのエンジェル）があり、神聖な山（ウマンテラさまの山）として信仰されていた。また、崎津地区にはマリア様が番傘をさし、対岸の二浦に歩いて渡ったという言い伝えがあるが、この伝承が今富地区ではマリア様の代わりに水方が高下駄を履いて歩いたという話に変わっているなど、今富地区では水方の影響が大きいものであった。ウマンテラさまの山の麓には水方がキリシタンの儀式で使用する聖水を汲んだ場所がある。今富3集落を祀る今富十五社宮沿いを流れる西川内川にはクレソンが自生している。これは九州にキリスト教を布教したフランス人のハルブ神父が植えたものとされる。

また、明治時代のキリスト教復活により建てられた教会跡や鬼作の小屋（孤児院）がある。今富教会が閉鎖されると、人々は仏教のまま生活することとなったが、仏壇にはサカシバを供えるという、他地域とは異なった伝統的文化を継承している。東側に位置する片白には神道の墓石の台座に、十字を刻んだものが存在する（図2）。



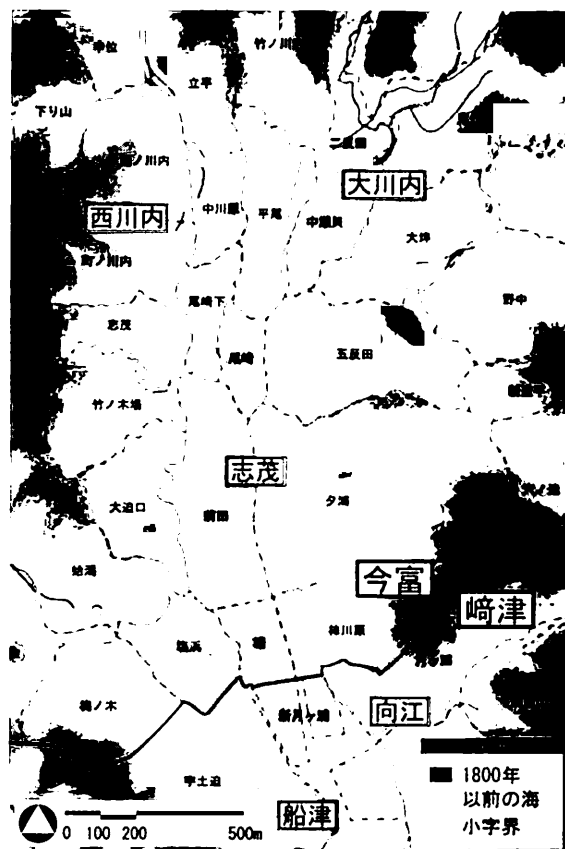
図2 今富地区における史跡の分布

(3) 崎津湾干拓事業

1) 干拓の概要

今富地区において、志茂集落の大部分は江戸時代から始まった干拓事業によって陸地化され、志茂集落の中央に位置する今富新田は干拓によって整備された水田である。ま

集落同士が道路で結ばれるようになった。昭和末期～平成に入るにつれて、さらに居住地としての干拓が進み、ほぼ現在の土地利用に近い今富地区が形成された。



(a) 1800年代前

(b) 1901(明治34)年

(c) 1947(昭和22)

(d) 1965(昭和40)

(e) 1979(昭和54)

(f) 2019(平成21)

図4 崎津湾の干拓変遷図

このように今富地区においては水方による儀式が行われるなど、キリシタン信仰が色濃く残っていた明治時代以前に比べ、長年にわたる干拓によって平地面積が拡大し、海に面する土地から農耕地へと景観が変遷してきた。今富地区における生業、景観の変遷に対して干拓は重要な転機であったことが分かる。土地利用や景観は変化したもの、カクレキリシタンに関連する史跡が多く現存していることが、今富地区の集落形成プロセスにおける特徴と位置づけることができる。

3. 農業を基盤とした生活環境構造の把握

本章では今富地区の生業である農業を基盤とした生活環境構造について分析した。まず、農地利用や住居形態など土地利用の状況を把握した。そのなかで、人々の生活・生業に不可欠な水利構造について詳細に整理した。最後に各地区の景観に関する特徴をまとめた。

(1) 今富地区における土地利用・農業水利調査

2011年4月9日と5月14日に今富地区の土地利用状況に関する調査を行った。調査項目は水田、畑、耕作放棄地、家屋の分布である。

土地利用調査結果から農業用水路網を確認することができ、今富地区は集落傍の田畑で耕作を行っており、地域住民の生活と生業である農業が密接な関係であることが分かった。このため、2011年8月25,26日、10月5、6日には今富地区における農業水利の調査を行った。ここではまず取水システムの把握を行った。次に今富地区における用水掛と用水掛内の入水、排水を調査し、今富地区における水利システムの調査を行った。

(2) 今富地区全域にみる土地利用と生活形態

今富地区は緩傾斜地に広大な田畑が広がっているものの、耕作放棄地が目立つ。また、水田においてはほとんどの場所が河川からの取水を行っており、1カ所のみため池からの取水を確認することができた。

今富地区における作付状況²¹⁾は表1の通りである。主に米、イモ類、果物がとれる。現在、今富地区においては1戸を除くほとんどの農家が兼業農家であり、各家庭で消費する分だけの農作物を栽培する農家が多い。今富地区における唯一の専業農家は養鶏を営まれている。この農家では鶏のエサになる飼料米も作っている。

また、農業センサスをもとに今富地区における農業形態²²⁾を表2に示した。総農家数、総戸数、非農家戸数、農家人口全てにおいて1970年から減少している。少子高齢化に伴う後継者不足による影響が顕著に出ていることが分かる。農家数増減率、農家人口増減率についても1970年以降、下降を続けていることが分かる。農家、農家人口の減少に伴い、耕作放棄地率は増加し続けている現状が見られる。

表1 今富地区における作付状況 (2011年)

種別	面積
新規需要米	16,790㎡
主食用水稻	114,510㎡
飼料作物	2,660㎡
一般作物(野菜等)	16,500㎡
永年性作物	9,300㎡
不作付地	129,510㎡
計	289,270㎡

(3) 集落別にみる土地利用と生活形態

1) 西川内集落

西川内集落は畑作中心であり、イモ類や野菜が栽培されている(図5)。集落が北から南にかけて約500m伸びており、家屋と畑が混在する(写真1)。現在、水田は1枚も確認することができない。他集落と比較すると耕作放棄地が少ないことも特徴として挙げることができる。

集落の中央を西川内川が流れる。西川内川は雨が少ない場合に干あがる地点がある。また、地質の関係で川の下に浸み込みまた湧き出す地点もある(写真2)。また、降雨量が多くなる梅雨の時期には氾濫することがあり、左岸側では度々浸水するエリアもあるようである。このように季節によって水量に大きな差があるため、安定した水の供給が求められる水田耕作が発達していないものであると推測される。

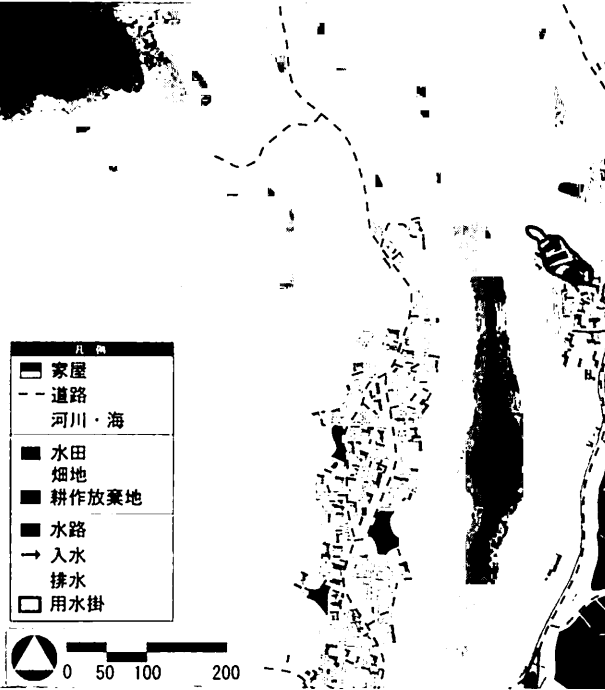


図5 西川内集落の現土地利用状況

表2 今富地区における農業形態

西暦	総農家数(戸)	総戸数(戸)	非農家数(戸)	農家人口(人)	農家数増減率(%)	農家人口増減率(%)	耕作放棄地率(%)
1970	122	147	25	514			
1975	103			381	-16.1	-28.1	0.35
1980	96	125	29	309	-7.9	-22.3	4.9
1985	74			239	-24.2	-19.3	9.8
1990	55	115	60	160	-32.1	-36.7	
販売農家	49			138			
1995	49			138	-10.0	-11.7	10.6
販売農家	32			87	-35.3	-36.4	6
2000	43	101	58	115	-4.7	-5.0	13.2
販売農家	25			69	-14.0	-14.3	8
2005販売農家	18			46	-23.8	-29.5	16.75

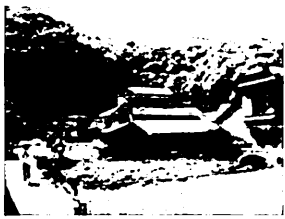


写真1 畑作中心



写真2 湧水地点

2) 大川内集落

大川内集落は畑と水田が混在しており、米やイモ類、野菜が栽培される(図6)。急傾斜地では果樹園も確認できた(写真3)。また、農業用機械がなく牛に器具を引かせ田畑を耕していたため、大川内集落では家屋の一階に牛舎跡も確認することができる(写真4)。

田畑を挟んで北側に家屋が広がり、南側に大川内川が位置する。水田耕作における取水のための堰は6カ所確認できた。また、川底のさらに下を通したサイフォンが1カ所あり、川を跨いだ用水掛がひとつ存在する(写真5)。ため池からの取水も1カ所確認することができた。

大川内川は西川内川に比べて年間を通した水量も豊富で安定しているため、川からの取水が容易である。そのため、大川内集落には広く水田が広がっているものと思われる。用水掛図からも分かるように大川内集落では複雑な水利システムが張り巡らされている。

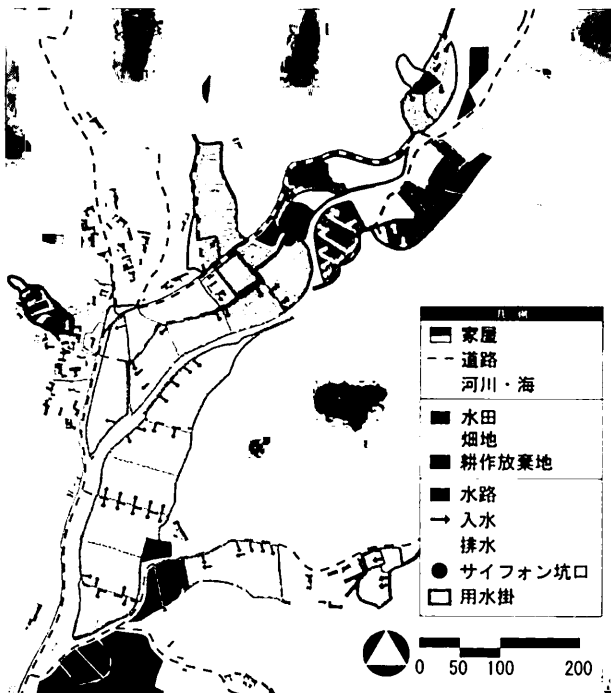


図6 大川内集落の現土地利用状況・農業水利図



写真3 果樹園



写真4 牛舎

集落の南側に位置する枝郷片白には取水目的の堰があり、以前は水田であったところの確認できるが、現在は耕作放棄地となっている(写真6)。

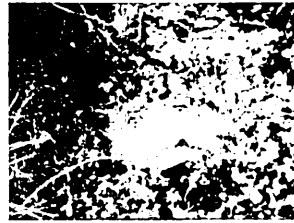


写真5 サイフォン



写真6 堰

3) 志茂集落

志茂集落の中央には崎津湾を干拓、1957(昭和32)年に区画整理が完了し整備された今富新田が広がる²³⁾(図7)。しかし、現在では西側の半分が耕作放棄地となっている。今富新田の東側には北から流れてきた西川内、大川内川が合流した今富川が流れる。二つの川以外にも東に位置する大字今富宇夕浦からの流れ込みもあり、今富川は年間を通して豊富な水量を保っている。

今富新田における大規模な水田耕作の他に南西に位置する枝郷湯、大字今富宇夕浦における畑作も見られる。水田耕作における取水のための堰は3カ所確認できた。今富新田は二つの用水掛が構成されており、南北で水利システムが異なっていることが分かった(写真7)。また、今富十五社宮の東に位置する水田地帯では畦を細かく作り、面積の小さな水田が複雑に敷き詰められているため、水路網も複雑なものになっている(写真8)。

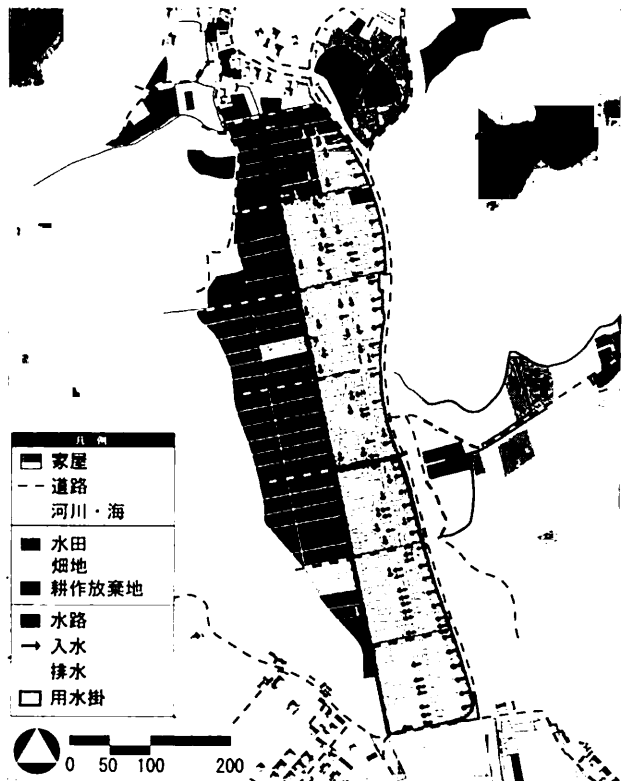


図7 志茂集落の現土地利用状況・農業水利図



写真7 用水掛の境界



写真8 細かい畦で
切られた水田

(4) まとめ

上記に示したように3集落における農業の営み方はそれぞれ異なっており、各集落における農地利用に関連した農村景観が構成されていることが明らかになった。

西川内集落は地質の関係や一定した河川からの取水が困難なため、家屋間の狭いエリアを利用した畑作中心の景観が広がっている。大川内集落は河川からの一定した取水が可能のため、広範囲において水田が広がっている。また、取水口の数も多く複雑な水路網が張り巡らされている。山腹には果樹園も確認することができる。志茂集落は中央に広がる今富新田における稲作、枝郷湯と夕浦における畑作が農業的な特徴である。一方、一枚の水田を細かい畦で切り、畑と水田を両立させる様子も見られることから季節や目的に合わせた農業形態がとられていることが伺われる。以上から、農業を基盤として3集落の生活環境構造の把握することができた。また、用水掛調査の際に地域住民へのヒアリングを行ったところ、今富地区では土地改良区（水土里ネット）が法人化しておらず、集落単位で農業水利に精通した方々が管理していることが分かった。このように、農業水利管理において地域住民間での組織化がうまく機能しているため今富地区の農業は成立していることが把握できた。しかし、将来農業の担い手がいなくなり、農業水利の管理が機能なくなると現在の今富地区の農村景観は衰退していくことが容易に想像できる。以上のことから今富地区における農業水利は農村景観維持における生命線であると言えるであろう。

(5) 今富地区の景観構造の把握

2章で示した集落形成プロセス、3章で示した生活環境から今富地区における景観構造を以下のように示した。

- 1) 古くは陸上交通の要衝であり、カクレキリシタン関連の史跡が豊富である
- 2) 迫と呼ばれる谷地形を干拓により陸地化した土地基盤を有する
- 3) 主産業である農業や山稼ぎを規範とした迫単位で形成される固有の農村景観が広がる

4. 地域住民による空間認識に関する分析

本章ではまず、2・3章で分析した集落景観、生活環境における地域住民の空間認識について分析を行う。地域住民へのヒアリング調査から得られた地域独特の地名から地域住民の空間認識を分析する。さらに、3集落の境界と

2章で示した史跡、1800年代以前の海岸線の想定図を重ねることで歴史と地形に着目した考察を行う。

2011年11月29・30日、12月14・15日にヒアリング調査を行った。調査では地域住民の方々に地図を見せ、3集落（西川内、志茂、大川内）の境界線を引いて頂き、地域独特な地名を抽出した。

(3) 調査結果

上記の調査方法に基づいて地域住民の方々にヒアリングを行ったところ、8名の方から回答を得ることができた。内訳としては西川内集落4名、大川内集落2名、志茂集落2名である。この8名の方々の回答を集計して、各集落の境界と地域独特の地名を整理した（図8）。調査における結果を以下に示す。

1) 3集落の境界

地域住民の方々にヒアリングを行い、3集落の境界線を引いて頂いたところ、全ての方が同じポイントを指定し、「行政区画で昔から決まっている。」という回答であった。西川内集落と大川内集落の境界線は今富十五社宮以北に伸びた山の尾根線のようにである。また、西川内集落と志茂集落の境界はある細い水路とその延長線上にある橋であるとの回答が多く得られた。志茂集落と大川内集落の境界を示す上でのポイントとしては片白橋、西川内三社宮、などが抽出された。志茂集落と崎津地区との境界は富津小学校、旧富津中学校北の道路、湯を北東から南西へ横断する道路であるとの回答であった。旧富津中学校の東の山腹には家屋が存在し、その家屋は向江（崎津地区）であることから、志茂集落、崎津間の境界線の東端は曲線を帯びた格好となっている。

2) 地域独特の地名

3集落の境界に関するヒアリング調査において、地域住民の方々が場所を指定する際に用いる独特な地名を地図に落とした（図8）。立平の迫、大碗の迫、竹の川内の迫、鬼作の迫、中山の迫は大字今富における小字名がそのまま用いられている地名である。小字名以外の由来や逸話がある地名に関する説明を以下に記述する³⁴⁾。

- a) 茶屋の迫、ずうめきの迫、盗人の迫：西川内集落にある南から北へ連なる迫の名前である。茶屋の迫にはその名の通り茶屋が存在し、そこで茶を盗んだ者がいたという。その盗人が逃げている途中で人に見られて「ズーン」としたところがずうめきの迫にあたる。また、ずうめきの迫にはズメ木と呼ばれる木も存在していた。その後、盗人が逃げ込んだ迫の名前が盗人の迫と呼ばれているようである。
- b) ダンボのへた（縁）：西川内川は昔から雨量が多くなると、頻繁に氾濫する川であった。西川内集落では大洪水によってできた淀みのことを「ダンボ」と呼んでいたそうである。西川内川左岸、西川内三社宮の北には何度もダンボができる地点があり、ダンボのへた（縁）と呼ばれている。
- c) 庵の向かえ：西川内集落と大川内集落に挟まれる山のなかでも南側の部分を指す地名である。（北側はウドと呼ばれる。）この山の西川内川を挟んだ向かい側には庵が存

在し、仏が祀られている。この庵の向かいにある山であることからこの地名がつけられたようである。また、西川内集落の住民のみが用いる地名である。

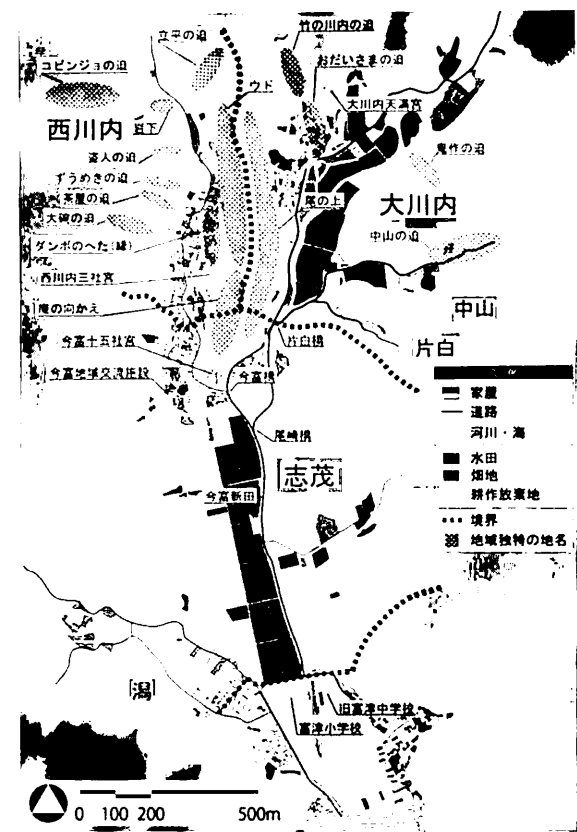


図8 3集落の境界と地域独特の地名

(4) 考察

1) 地域独特の地名に関する考察

上記のように抽出された地域独特の地名を迫に関する地名、山に関する地名、川に関する地名に分類し整理した(表3)。この表から、西川内、大川内集落共に迫に関する地名が多いことが分かる。この結果から、2つの集落の住民は場所を一つの迫地形を単位として見ていることが分かる。迫に関する地名は昭和後期まで多く残っていた山腹の畑の位置を指す際に用いていたようである。また、西川内集落と大川内集落の境界に伸びる山を両集落は異なる名前と呼んでいることから、この山が一つのコミュニティを形成する上で重要であったことが分かる。

一方、西川内集落においてはダンボのへた(縁)、岩下など西川内川に関する地名も抽出された。この結果から西川内川が氾濫した歴史、記憶が地域住民の生活のなかに刷り込まれていること、西川内川の親水性が伺われる。

上記のように今富地区の地域住民は山・川、特に迫に関して名前をつけ、地域を細かく切り取ることでディストリクト化していることが明らかになった。

表3 地域独特の地名の分類

西川内		大川内
・立平の迫 ★	・茶屋の迫 ★	・竹の川内の迫 ★
・コビンジョの迫 ★	・大碗の迫 ★	・おだいさまの迫 ★
・岩下 ●	・ダンボのへた(縁) ●	・尾の上[志茂] ▲
・盗人の迫 ★	・庵の向かえ[志茂] ▲	・鬼作の迫 ★
・ずうめきの迫 ★	・ウド ▲	・中山の迫 ★

★ 迫に関する地名 ▲ 山に関する地名 ● 川に関する地名

2) 3集落の境界に関する考察

3集落の境界線と今富地区における地形や史跡との関連を考察するために、ヒアリング調査によって得られた3集落の境界線と本論文の第2章で示した図2、図3を重ね合わせたものを作成した(図9)。

まず1800年代以前の海岸線を想定した図(図3)と3集落の境界を比較すると、西川内集落と志茂集落間の境界、大川内集落と志茂集落間の境界共に、想定した海岸線に非常に近いところに3集落の境界が位置していることが分かった。ここから、3集落の境界を決定する際に以前の海岸線が基になっている可能性も考えられる。

次に今富地区に残る史跡(図2)と3集落の境界との関連について見てみることにする。図からも一目で分かるように西川内集落と志茂集落間の境界線上に聖水取水場、水方屋敷跡が位置している。この境界線を引くにあたって聖水取水場と水方屋敷跡がポイントにされたことは十分考えられるであろう。

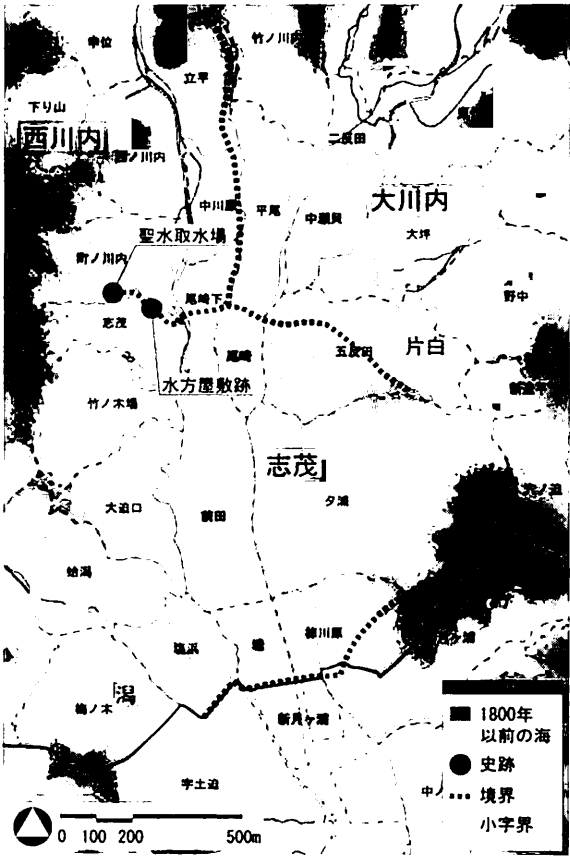


図9 3集落の境界と史跡、1800年代以前の海岸線との比較

(5) まとめ

上記の考察より、今富地区における住民の空間認識について以下に列挙する。

- 1) 今富地区の住民は地域独特の地名を用いて土地を細かく分けて認識している。
- 2) 地域独特の地名は迫に関するものが多く、今富地区の住民は景観構造を認識する上で「迫」を一つの単位として捉えている。
- 3) 今富地区の住民が把握する3集落の境界は聖水取水場、水方屋敷跡と1800年代以前の海岸線と関係する可能性がある。

5. おわりに

本研究では、文化的景観の調査手法に基づき、天草今富地区の歴史、自然環境、生活・生業の変遷を調査し、景観構造を把握した。さらに地域住民の方々の空間認識について分析した。

2章では、今富地区におけるカクレキリシタン関連の歴史や残存する史跡、干拓による土地造成による地形・景観の変遷に関して整理を行った。その結果、今富地区は1800年以前、中山間地区であったが、干拓により平地・水田を獲得し農耕地区へと変化していったことが明らかになった。また、特有の谷地形であること、干拓以前は集落間が海により隔たれていたことにより今富地区は閉ざされたコミュニティであったことが分かる。

3章では土地利用状況、景観特性、農業水利に関する現地調査を行った結果、3集落の集落分布や景観要素の差異が分かった。また、地形・農業水利の特徴に伴う3集落の景観の差異に関して明らかになった。2章で示した集落形成プロセス、3章で示した生活環境から今富地区における景観構造を示した。

4章では、景観構造に関する地域住民の認識に関して把握するために、ヒアリング調査によって地域独特な地名を抽出し、その地名の由来は今富地区における地形や歴史に関連していることが分かった。

以上のように、今富地区の歴史、自然環境、生活・生業という暮らしに根ざした景観構造を示した。

謝辞：平田豊弘氏、原田菜林氏をはじめとする天草市教育委員会の皆様、天草市富津出張所、河浦支所、JAあまくさ河浦支所の皆様、(独)農業・食品産業技術総合研究機構九州沖縄農業研究センターの島武男氏には資料提供、現地調査など本当にお世話になりました。深く御礼申し上げます。

【引用・補注・参考文献】

¹⁾ 文化庁ホームページ

<http://www.bunka.go.jp/index.html>

²⁾ 志摩邦雄、小柳武和、笹谷康之、山形耕一：釣り人

とダイバーの環境認識からみた海岸・海中の景観資源、土木計画学研究・論文集、7巻、163-170頁、1989

³⁾ 金沢大学文学部地理学教室：2003年度地域調査実習報告書「奥能登」、75-83頁、2003

⁴⁾ 田原秀雄、笹谷康之：地名から見た集落の空間認識に関する研究、土木学会年次学術講演会講演概要集、第4部、55巻、150-151頁、2000

⁵⁾ 平成17(2005)年国勢調査、2005

⁶⁾ 天草郡河浦町役場：河浦町50年のあゆみ、天草町河浦町役場、p.4、2004

⁷⁾ 天草市教育委員会教育部文化課：天草市崎津の漁村景観保存調査報告書・保存計画書、p.180、2010

⁸⁾ 前掲7)、p.115

⁹⁾ 前掲7)、p.116

¹⁰⁾ 前掲7)、p.78-83

¹¹⁾ 天草市教育委員会教育部文化課：今富の文化的景観文化的景観保存計画書(案)、p.3-17、2011

¹²⁾ 前掲7)、p.8-57

¹³⁾ 塚政：天草崎津港近郷海浜要図、九州大学所蔵、1823

¹⁴⁾ 郡中新開絵図面扣、松浦家所蔵、1833

¹⁵⁾ 国土地理院：5万分の1地形図 牛深 1901(明治34)年測量、1904

¹⁶⁾ 国土地理院：2万5千分の1地形図 河浦 1965(昭和40)年測量、1967

¹⁷⁾ 国土地理院：2万5千分の1地形図 河浦 1979(昭和54)年修正測量、1980

¹⁸⁾ 天草市教育委員会：富津地区平面図、九州航空株式会社、2009

¹⁹⁾ 国土地理院：1947年空中写真、財団法人日本地図センター

²⁰⁾ 国土地理院：1975年空中写真、財団法人日本地図センター

²¹⁾ JAあまくさ河浦支所：今富地区水田作付状況、JAあまくさ河浦支所、2011

²²⁾ 農林水産省：農林水産省2005年農林業センサス、農林水産省、2005

²³⁾ 前掲7)、p.11

²⁴⁾ 富津の文化伝承の会編集委員会：ふるさとの文化(第二集)、富津の文化伝承の会、p.36、2005